

いわゆる「土より成るグスク」について —沖縄本島北部のグスクを中心に—

當眞嗣一
(沖縄県立博物館)

On Gusuku(Castle),enlarged by cutting a mountain

- Especially Gusuku located in northern part of Okinawa main Island -

Shiichi TOMA

(Okinawa prefectural Museum)

1、はじめに

沖縄のグスクの多くは石垣を多用して築城されている。しかし、グスクを実際に踏み歩き、土地に刻まれたその証拠を見て、それを縄張りという観点で押さえるといったいわゆる縄張り調査が進展していくことに伴い、石垣を全く使用しないグスク、あるいは、石垣・土塁・切岸を巧みに併用しながら築造されたグスクなど、多様なグスクの存在が明らかになってきた⁽¹⁾。石垣のないグスクでは、山の傾斜面や頂上部を削平して平場を確保し、山の斜面などを削り出して切岸をつくることで城壁とする。さらに、城外と地続きの地形では堀を掘って独立性を保つことで防御性を高めている⁽²⁾。

これまでグスクを認識する方法として、石垣や考古学上の遺物の有無などを中心に判断することが多かった。しかし、石垣のないグスクや遺物が発見されないグスクも存在することから、今後は、ブッシュをかきわけてグスクの中に入り、土地に刻まれた証拠の中からグスクかどうかを判断することがもとめられている⁽³⁾。

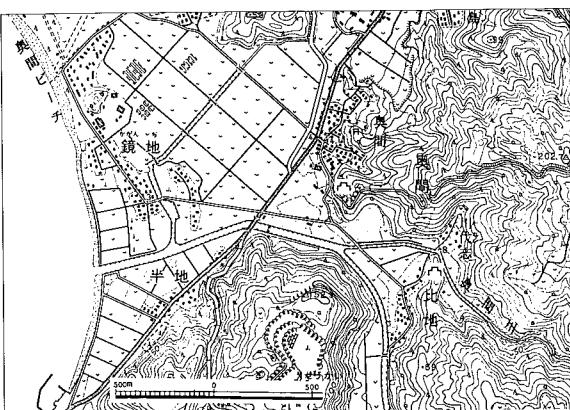
城という字は、その字が示すとおり、土と成の二字からできている。もともと日本では、溝（堀）を掘り、その掘りあげた土を盛って土塁をつくることで防御施設とした。日本全国に3~4万も存在するといわれる中世城館の場合がそれである。私たちは、城というとすぐ天守閣が聳える豪壮華麗な城をイメージしがちであるが、この種の城が出現するのは、中世末から近世初期にかけてであり、それ以前の城はすべて土の城であった。したがって、この沖縄にも土のグスクがあつて当然であり、これまで、土のグスクがよく知られてなかつたのは、石積みグスクが発達していたために、土のグスクについてあまり気が付かなかつただけである。

南西諸島における土のグスクの分布は、奄美大島や沖縄北部、非石灰岩地域で多く見られる。本稿では、とくに沖縄本島北部に見られるいくつかの土のグスクにスポットをあて⁽⁴⁾、その構造がどうなっているかについて考えてみることにする。

2、アマグスク

このゲスクは国頭村字奥間にある。奥間の集落は、国頭村役場のある辺土名から約2km程南にあるが、昔は間切の中心地であり由緒ある古い村里であった。沖縄本島を南北に貫通する国道58号線を境にして東側には集落が展開し、西側には奥間田ーブクと呼ばれる農耕地（最近まで北部屈指の水田地帯であったが現在ではキビ畑に変わっている）

第1図アマグスクとパンギナグスク



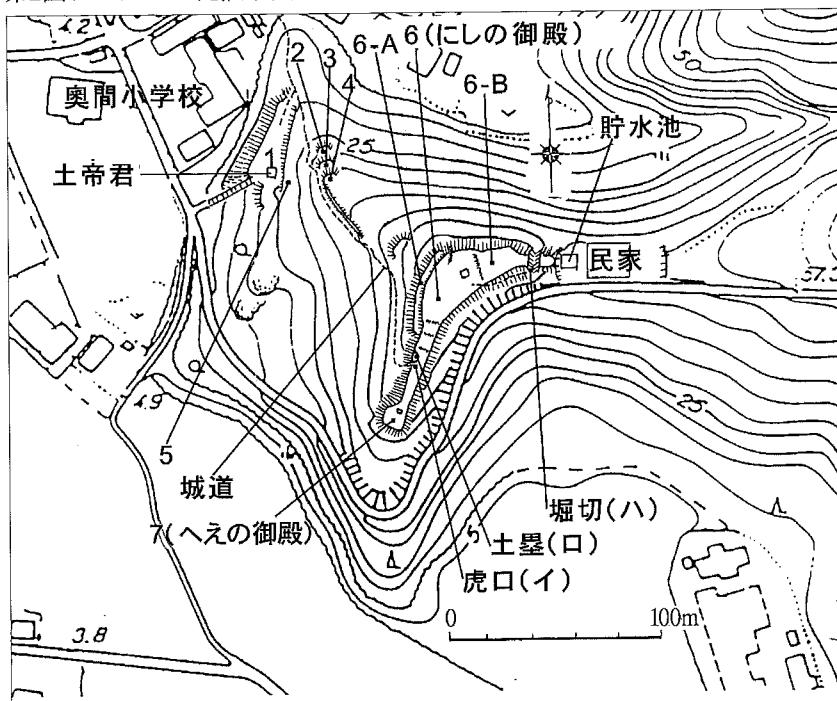
アマグスク（上）パンギナグスクと小玉森（下）

が広がっている。

アマグスクは、奥間集落の南端、小高い丘の上に立地している。ゲスクのピーク部に立つと、北から西にかけて奥間の集落、南側には、比地川と奥間川流域に広がる低地帯（過去水田地帯だったのが、今ではキビ畑に変わっている）を眼下のうちにとらえることができる。比地川は、与那覇岳に源を発し、比地集落の下流で奥間川と合流してやがて東シナ海に注いでいる。

ゲスクと呼ばれる小高い丘は、別名

第2図アマグスク縄張り図



アマンチヂとも称されており、部落発祥の山として住民の信仰の場所になっている。アマンチヂの西寄りには土帝君（方音トーチーク）を祀る宮があり、この宮の北西方向集落内に、琉球王朝第二尚氏の祖尚円王を庇護したというアガリカンジャー（屋号）の住居跡や、アガリカンジャーゆかりの鍛冶道具を祀った拝所等がある。

グスクには、奥間小学校の南に隣接する土帝君の広場を左側に廻り込みながら尾根沿いを登って行く。土帝君の祀られている広場1は、山の斜面を削平してつくられていて、約100m²の広さを有している。この平場は、現在は土帝君を祀るエリアとして活用されているが、土帝君がここに安置されたのは近世以後のことであり⁽⁵⁾、それ以前、つまりグスクが機能していた時代には、この土帝君の広場も曲輪のひとつだった可能性もある。したがって、グスクの城域としては、この土帝君エリアあたりまでを含むと考えたい。

さて、土帝君を祀る広場の北隣にはグスクに通ずる小径が取りつけられ、グスクに通じる城道となる。この城道を山のピーク部に向かって進んで行くと、左手には三つの小さな削平段（2～4）が取りつけられていて城道に登ってくる者に対して横矢を効かす工夫がなされている。右手の方は、約1m程の落差があり、平坦に造成されているが、ブッシュに覆われ詳細は不明である（曲輪5）。この曲輪5の平坦地は、土帝君の直上に位置し、立地的に見ても曲輪だった可能性は高い。しかし、この一帯は後世の改変がかなり進んでおり、畑として造成された平坦地なのか、それとも、もともと曲輪だったものが後世畑として利用されたものなのか判然としない。

等高線に沿うように城道を登って行くと虎口（イ）となり、左に折れて登れば曲輪6、右に折れれば曲輪7となる。6と7の曲輪は、南北に距離をおいて立地し、北側を「にしの御殿」、南側を「へえの御殿」と呼び、二箇所とも住民の信仰の場となっている。

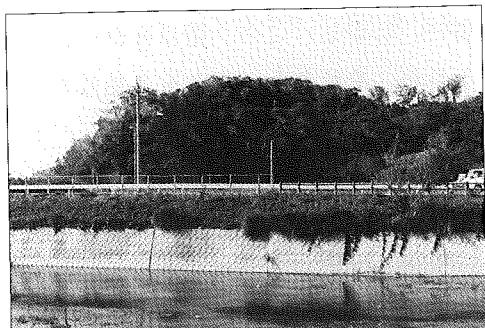
そのうち「にしの御殿」と呼ばれる曲輪6は、標高約50mを測り、約400m²の広さを有していて、西に腰曲輪6-Aが隣接する。曲輪6のやや北寄りにはコンクリート造りの祠が建立されているが、すぐその後方には、約50cmほどの比高差をもって基壇風に造成されたピーク部（6-B）がある。この曲輪6-Bの削平地には主殿があった可能性もある。このピーク部の東側後方に堀切（ハ）が認められる。堀切は、幅約4m、現状の高さ約2mのものである。この堀切は、東に続く尾根からの侵入を防ぐ意図のもとに造られたものであるが、一本の堀切では不完全であり、まだ数本の堀切がこの尾根づたいに存在していた可能性は高い。しかし、現状は、貯水池や民家が建設されたために地形が改変され、確かめ得ないのが残念である。

曲輪6の西側には、約2m幅の細長い腰曲輪6-Aがめぐり、この腰曲輪は虎口（イ）付近で終わっている。主郭部に相当する6、6-A、6-Bの周辺はいずれも切岸になっていて

鋭い斜面を形成している。とくに東側の与那覇岳登山道路に面している部分については急峻さが目立つ。

さて、主郭部への虎口であるが、「にしの御殿」と「はえの御殿」の接続部、瘦せ尾根がさらに細くなる所に開いている。虎口は坂虎口となり、この虎口のすぐ北側には土壘（口）があるため虎口の押さえとして機能する。虎口と主郭部との比高差は約2～3m程あるが、そこに、二段の削平段が置かれているため虎口から侵入してくる敵兵に対して押さえが効くような工夫がなされている。また、これらの削平段や6-Aの腰曲線からは、城道を登って来る敵兵に対して横矢を掛けることもできる。

「はえの御殿」は、約4×6m程の平場になっているが、現在、そこにもコンクリート造の祠が建立されている。周辺は切岸になっていて、外からの侵入を防ぐことができる。この曲輪に望楼を置けば、南に展開する比地の集落や農耕地を眼下に見下ろすことができるため、その方面的動向を捉えるには絶好の場所となる。そのことから考えると、「はえの御殿」は見張のための曲輪だった可能性は高い。



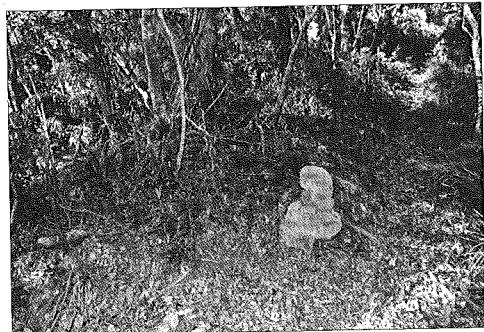
図版1 アマグスク（南より）、手前の川は奥間川



図版2 アマグスクの堀切



図版3 アマグスク虎口



図版4 アマグスク虎口の前にある土壘

以上、述べてきたように、アマグスクはまったく石垣を用いないグスクであり、いわゆる土より成るグスクである。石垣こそないが、堀切・切岸・土壘を巧み使いながら軍事的な防御機能もつ城として普請されていることは、これまで見てきた縄張り構造からも理解されよう。やはり、アマグスクは、地元住民からもグスクと呼ばれているように城として認識できるグスクである。

なお、このグスクからは考古学上の遺物がまだ発見されてないので、年代観については不明である。部落住民の間では、奥間集落はもと「にしの御殿」「はえの御殿」一帯にあったということになっていて、部落の発祥地との関係で伝承されている⁽⁶⁾。軍事的機能を有するグスクが部落の発祥と結びついているところは、他の地域にも見られるところ⁽⁷⁾であり何らかの意味があったのであろう。あるいは、グスクが「村の城」だったということを示唆しているのかも知れないし⁽⁸⁾、その意味について改めて考えてみる必要があるようと思われる。

3、パンギナグスクと小玉森について

パンギナグスクと小玉森は、国頭村字比地の聖なる森として住民の信仰の場所となっている。比地の集落は、沖縄本島の最も高い与那霸岳の西に発する比地川流域に展開する国頭村でも比較的古い集落の一つである。集落は与那霸岳の陵線に連なる丘陵の裾野にへばりつくように立地し、集落の後方、すなわち東の方向に小玉森、北東にパンギナグスクがある。前述したアマグスクとパンギナグスクおよび小玉森との距離は、比地川の流域に広がる沖積平野を挟んでわずか600 mほどである。この間には奥間川が流れている。

さて、小玉森について『沖縄の古代マキヨの研究』を著した稻村賢敷氏は、次の理由により古代部落マキヨの遺跡だと考えている⁽⁹⁾。その理由というのは、小玉森の名称である「コダマ」の「マ」は由来記編者の挿入によるものだから、「小玉森」というのはもともと古代部落名コダ森の名称であろう」ということである⁽¹⁰⁾。

では、具体的に小玉森の縄張り図を見ることにしよう。

小玉森と称される丘には現公民館の前の小径を登って行くが、小径は斜面を切り開いて造られており、幅約1mほどの急勾配の坂道となっている。小径の左側の雑段状になった平坦地には古い屋敷跡が数箇所残っている。これらの屋敷跡をよく見ると、屋敷囲いの石垣や建物の施設などが荒廃したまま部分的に残っており、比較的新しい時代に空屋敷になったことをしめしている。中には今でも屋号を残している屋敷跡がある。

曲がりくねった旧勾配の城道を登って行くと、やがて小玉森の虎口に達する。西面す

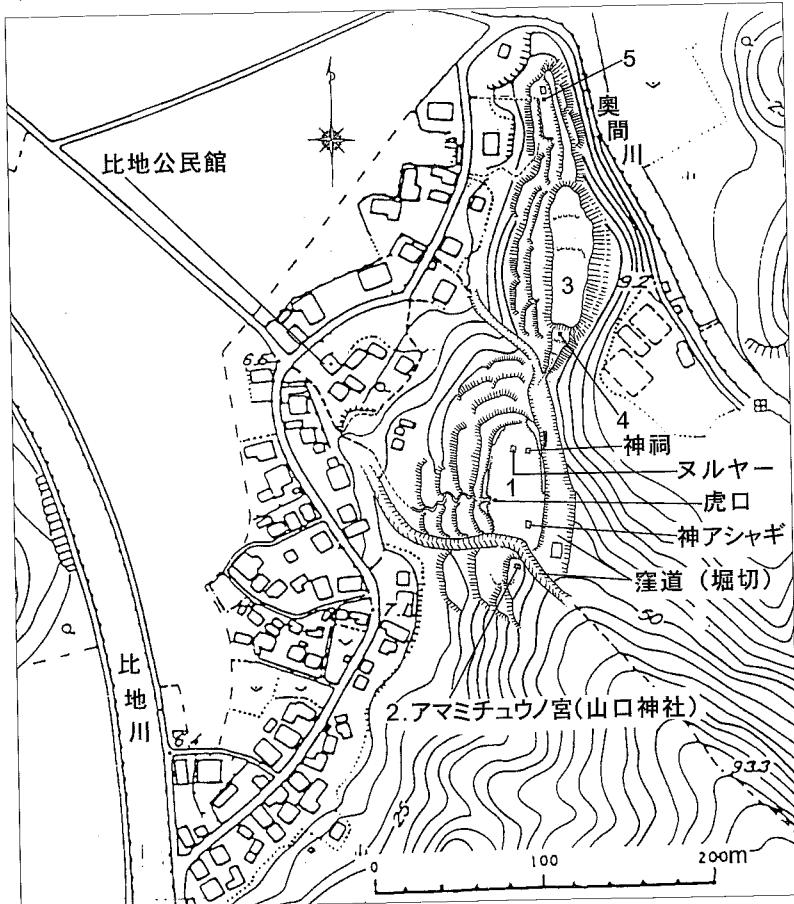
る虎口の両脇にはしっかりした土塁が認められる。虎口の構造は、坂虎口となり、わずかに屈曲し、そのうえ幅も狭まっていてなかなかガードの固い作りになっている。また、虎口を中心とする城壁ラインが矩形にとられ横矢を効かす工夫もされている。

さて、虎口を抜けると主郭にあたる曲輪1に達する。ここは小玉森の中心部にあたり、標高約43mを測る。この曲輪1の面積は、約2300m²程で、その中に神アシャギ、ヌルヤー、神祠などの三つの祭祀場があり、これらの祭祀場を中心に概ね三つの区域に別けられる。南側には神アシャギ、北側にヌルヤーの小祠が建ち、ヌルヤーの東側に神祠がある。神アシャギとヌルヤーの間の中央広場は遊び庭と呼ばれ、その広場を囲んで三つの祠がそれぞれ区域ごとに建立されている。神アシャギは、八本柱の壁のないセメント瓦葺の建物であるが、戦前は木造茅葺の建物だったようである。ヌルヤーと神祠はコンクリート造りの粗末な建物であり戦後になって改築されたものであろう。遊び庭の東側を中心に曲輪の縁辺部には幹廻り数mもある赤木の老木があり、老木の下には石の香炉が

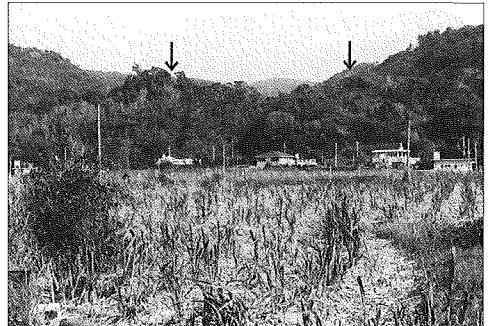
置かれている。稻村氏の調査によると、これらの石の香炉は、集落内各氏族の拝所になっているとのことである。その他に、拝所としては、神アシャギの南に窟道とよばれる空堀を挟んでアマミチュウノ宮(山口神社ともいう)と称されるお宮がある。

ところで、この小玉森を俯瞰して見ると、幅約5m、深さ約3mの窟道と称される空堀によって3つのグループに区画され、そして、堀底

第3図 パンギナグスクと小玉森の縄張図



を通路として3つのグループが連結する構造を取っていることが看取される。空堀の北側は神アシャギ・ヌルヤー・神祠のあるグループAであり、南側はアマミチユウノ宮を中心として、その下に小曲輪群を付属させているグループBである。さらに、グループAの北にはパンギナグスクと称されるグループCがある。



図版5 パンギナグスク 小玉森

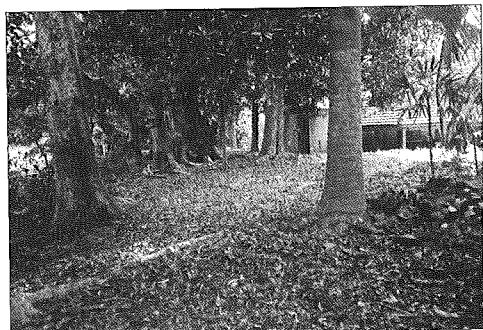
グループAについては、前述したとおり曲

輪1を主郭とするグループである。考古学的な発掘調査が実施されたわけではないが、曲輪1の東縁部に土器や輸入陶磁器、貝殻などを包含する黒色土層の厚い層が認められ、文化層があることがわかる。図版-7に示したのが、この断面から採集した遺物である。これらの遺物包含層の形成などからみて、この曲輪1には明らかに人間が住んだ痕跡を認めることができる。周辺部に土塁を廻し、その下に腰曲輪となる削平段を幾重にも付属せしることによって、外からの侵入者を防ぐことができる。主郭の規模、防御上の機能等から考えると、3つのグループのうちでは、最も中心をなすグループであろう。いま、3つのグループの関係についてみると、グループAをとりまくように南側にグループB、北側にグループCがつくられていて、その先後関係は、グループBとグループCの成立に先立ってグループAが成立していたことが理解されよう。

次にグループBとグループCの空間構成について見ることよししよう。

グループBは、アマミチユウノ宮（山口神社）のある曲輪2を中心とする窪道（空堀）の南側にあたる曲輪群である。北は空堀によってグループAと区切られ、南側は約3～4mの比高差をもつ断崖となっているために完全に独立した形をとる。このグループが特徴的なのは、いずれの曲輪も小さく、これら的小規模曲輪群が下の方から雛段状に数段連なっているということである。曲輪から曲輪への通路は特別につくられているわけではなく、下の曲輪を跨いで上の曲輪に登といった構造である。いずれの曲輪にも土塁は認められないが、切岸は高く約3m前後はあると思われる。アマミチユウノ宮の曲輪2は、グループBのなかで最も標高の高い位置に立地し、このグループのなかで最も防御機能の比重が高い曲輪だということがわかる。グループBからグループAに行くには、一旦空堀を出て、堀底を通らなければならぬ仕組みになっている。雛段状の数箇所の曲輪には祠が建立されており、住民の間から信仰されている。

グループCは、パンギナグスクと呼ばれている小高い丘に築かれた曲輪群である。こ



図版6 小玉森の主郭部



図版7 小玉森主郭部から採取された遺物

のグループは、グループAの北にあり、堀切状となった小さな谷間によってグループAとは遮断される。グループCの中心的存在の曲輪は曲輪3である。この曲輪は標高40mのピーク部を削平し、約1000m²程の面積を有する。曲輪の内部は約50cmの段差をもつ3つの削平段によって区分できる。その中でも最も規模の大きい平場には小祠が建立され住民から信仰されている。この曲輪3の南側に小曲輪4があり、曲輪3から出撃するには、この小曲輪4を経由し、そこから窪道の空堀底に進出するようになっている。パンギナグスクの主郭がこの曲輪3であることは、東側が断崖に面し、西側には数段の削平段が連なっていることからも読みとれる。

曲輪3の北側の台地続には、約1m程の落差をもって痩せ尾根が走り、その尾根の先端部に曲輪5がある。この曲輪5には石積み基壇が置かれ、その脇にコンクリート造りの祠が建立され信仰されている。この曲輪5は、丘陵部の先端部に立地していて、比地川から分岐する奥間川やその流域に展開する沖積平野を完全に俯瞰できる位置にある。曲輪5には物見櫓が置かれていた可能性は高い。

喜如嘉グスク

喜如嘉グスクは、大宜味村字喜如嘉にあり石垣のないグスクである。標高約95mの小山のピークに築かれていて、喜如嘉の集落からは仰ぎ見るような位置にある。大宜味村教育委員会が発行した遺跡分布調査報告書⁽¹¹⁾には、次のように記されている。

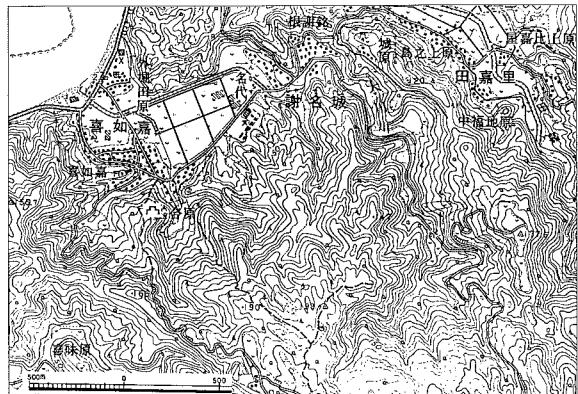
「グシクと呼ばれる一帯は赤土のマージ層で、石墨もなく遺物も全く見あたらない。喜如嘉グシクを語る文献もなく、何時から『グシク』と呼んでいたのか明らかでない。」
たしかに、喜如嘉グスクには、石垣などはまったく見あたらないし、遺物などの散布も確認できない。しかし、グスクと称する小山をよく観察すると、その頂上部は平坦に

削平され、尾根の流れに沿って南北に細長い平場になっていることに気付く。この平場はまさに人為的に削平されたものであり、その外縁部に小曲輪群、すなわち腰曲輪を付属させていることがよくわかる。また、南側の尾根続きを遮断して堀切も認めることができる。では、縄張り図を見ながら喜如嘉グスクの構造を見ていくことにしよう。

喜如嘉グスクの主郭部は曲輪1である。この曲輪は、山のピーク部を利用しており、平坦に造成されている。現在、ブッシュになっていて平坦面を詳細に観察することはできないが、南北を軸とする約2000m²の比較的広い曲輪である。この曲輪の東側は、急な傾斜面になって七滝から延びる幸地川に接している。また、西側は斜面が緩く、そこに腰曲輪が廻る。集落に続く北斜面には、削平段が幾重にも続き、山地特有の耕作地である段々畑と見誤るような状況である。これらの削平段には、実際、近代の耕作や植林にともなうものもあるが、主郭となるピーク部の曲輪との関係やあるいは削平段の取りつき方など、諸遺構を総合して判断すると、やはり、その多くが防御された削平地ではないかと思われる。

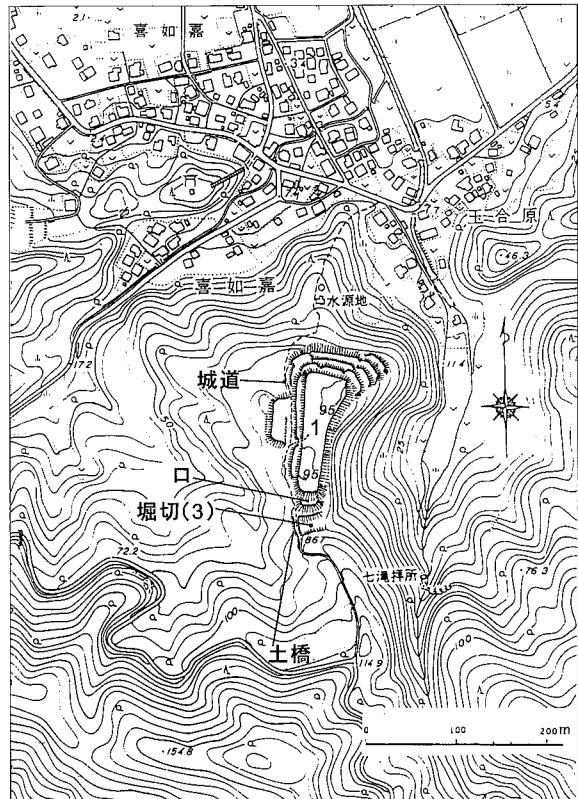
さて、このグスクで注目すべきは、南側の尾根続きを自然地形を利用した堀切状の遺構が見られることである。3がその遺構であるが、現状で見る限り、堀底は箱型となり、幅8m、堀底と曲輪1との高低差は約6～7mもある。堀底の西寄りに土橋が認められ

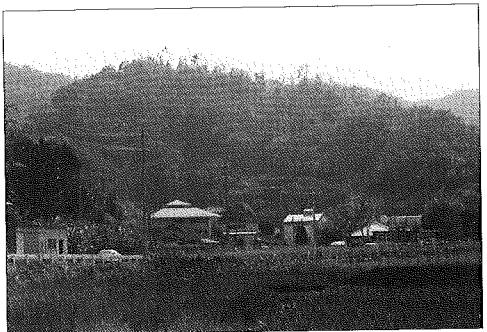
第4図 喜如嘉グスク位置図



喜如嘉グスク

第5図喜如嘉グスク縄張図





図版8 喜如嘉グスク（北から）

る。曲輪1の南側斜面、つまり、堀切から曲輪1に連なる傾斜面に腰曲輪口が取りついている。3の堀切から上がって来る敵兵を迎撃する目的であろう。

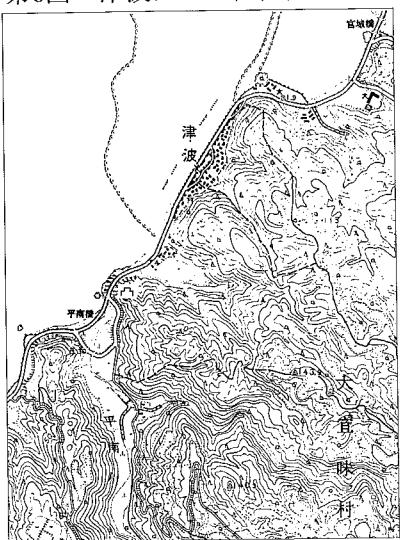
集落からグスクへ行くには、現在の喜如嘉集落のやや東寄りのところに取りついている小さな山道を登って行く。この山道は、グスクの頂上から下りてくる尾根を縦断するようにして進んで行くが、その途中に簡易水道の水源地があり、この水源地をさらに登っていくとやがてグスクに到着する。

グスクの道、つまり城道は、腰曲輪の真下を通る形で取りついているために腰曲輪からの側面観察が可能となり、グスクを目掛けて突進してくる敵に対して防御するのに好都合である。また、城道を登ってくる敵兵に対して横矢を掛けることもできる。さらに、曲輪1の虎口の左右には腰曲輪が置かれ、城内の侵入者に対して相横矢が効くよう工夫されている。

以上、見てきたように、「遺構が何もない」といわれていた喜如嘉グスクではあるが、実際、ブッシュをかきわけてグスクを踏み歩くことで、土地に刻まれた遺構群を読みとることができるのである。

津波グスク

第6図 津波グスク位置図



津波グスク

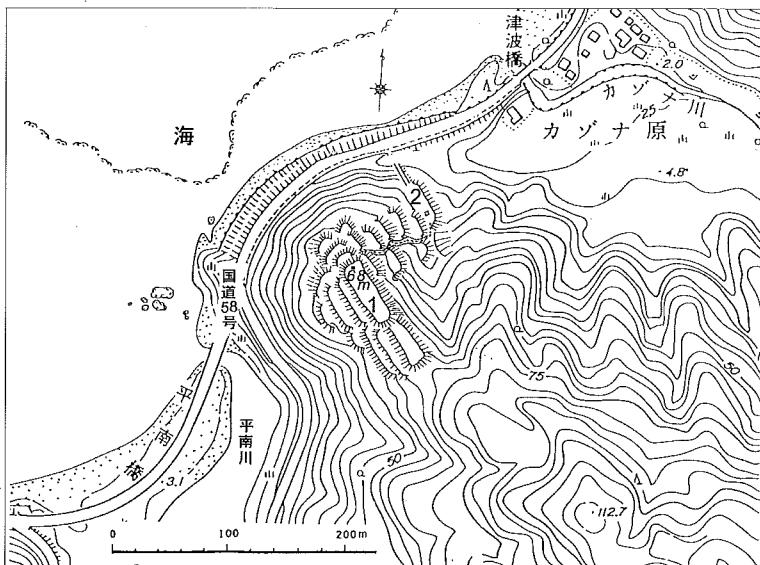
このグスクは、大宜味村字津波の南西を区切る丘陵の先端部、大宜味山塊の支尾根が海に突出するところの山頂部に占地されたものである。グスクの南西方向には平南川が流れ、北東には名前の由来となった津波の集落が立地する。

島袋源一郎が著した「国頭郡志」には、「津波村の始祖、板干瀬大主(イチャヒシフンシー)の居住したところであったと伝えられ、城跡は部落の氏神を祀った御嶽として、部落民が拝んでいるという」⁽¹²⁾と書かれている。

グスクの縄張りは、標高68mのピーカ部を削平して主郭を置き、その東と西に階段状に曲輪を配置する縄

張り構造である。主郭の曲輪1は、約60cm程の段差によって二つに区切られるが、明瞭な仕切りがあるわけではないので、一つの曲輪としてみなしていい。また、この曲輪の軸線は北西から南東を取り、丘陵の尾根に沿った形の略東西に細長い曲輪になっている。さて、この曲輪にも城壁

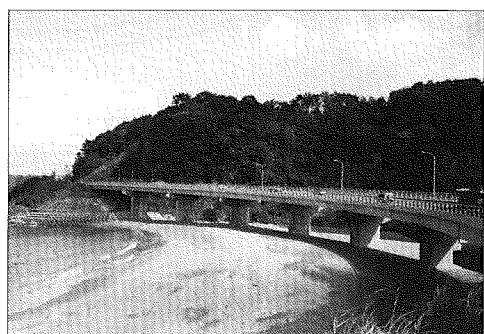
第7図 津波グスク縄張図



としての石垣は見られない。新城徳祐氏は「この城跡は、今では城跡らしい城壁の石垣は残っていないが、おそらくは城跡の下をめぐって造られた海岸の道路工事や護岸工事などのために、城壁の石垣が崩されて使用されたものであろう」と書いているが⁽¹³⁾、実際、どの曲輪を見ても石垣の抜き取り痕は確認されない。したがって、新城氏がいうように石垣がくずされたと見るのはどうかと思う。このグスクはもともと頂上部に築かれた単純な主郭を中心としてその周辺に階段状に曲輪を配置しただけのグスクだったものと思われる。

国道から10m程入ったところにグスクに登る小径が取りついている。この小径を約20m程行くと、幅3~4mの細長い平場となる。この平場には津波部落の漁民が豊漁と航海安全を祈願した祠が建立されており(曲輪2)、拝所になっている。この拝所の左脇にグスクへの城道が取りついている。城道は、等高線に沿って丘の上に延びており、この城道を睨むように削平段が幾重にも築かれている。城道を登ってくるものに対しての厳重な警戒ぶりが窺える。

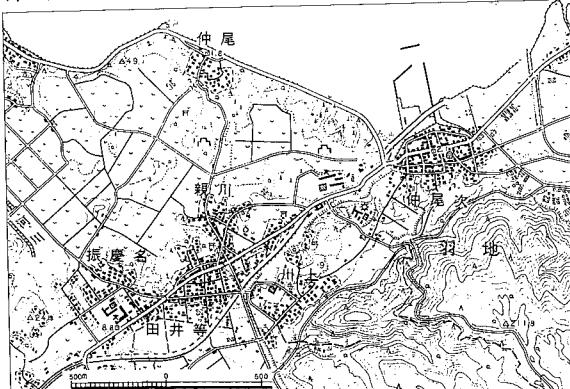
ところで、このグスクの機能についてであるが、北端に向かう旧道筋に立地していて、交通の要衝に築かれていることから考えると、やはり、道筋の押さえとしてのグスクだった



図版9 津波グスク（西から）

可能性は高い⁽¹⁴⁾。このことに関して新城氏は「板千瀬大主は、津波部落の前方にある海岸寄りの丘陵上に城をきずいて、根謝銘城の第一線として、ここに居城して堅く前線を守っていたのであるが、根謝銘城主の大宜味接司と共に、第一尚氏の三山統一後は野に下ったであろうと思われる。」と考察⁽¹⁵⁾している。

第8図 仲尾次上グスクの位置図

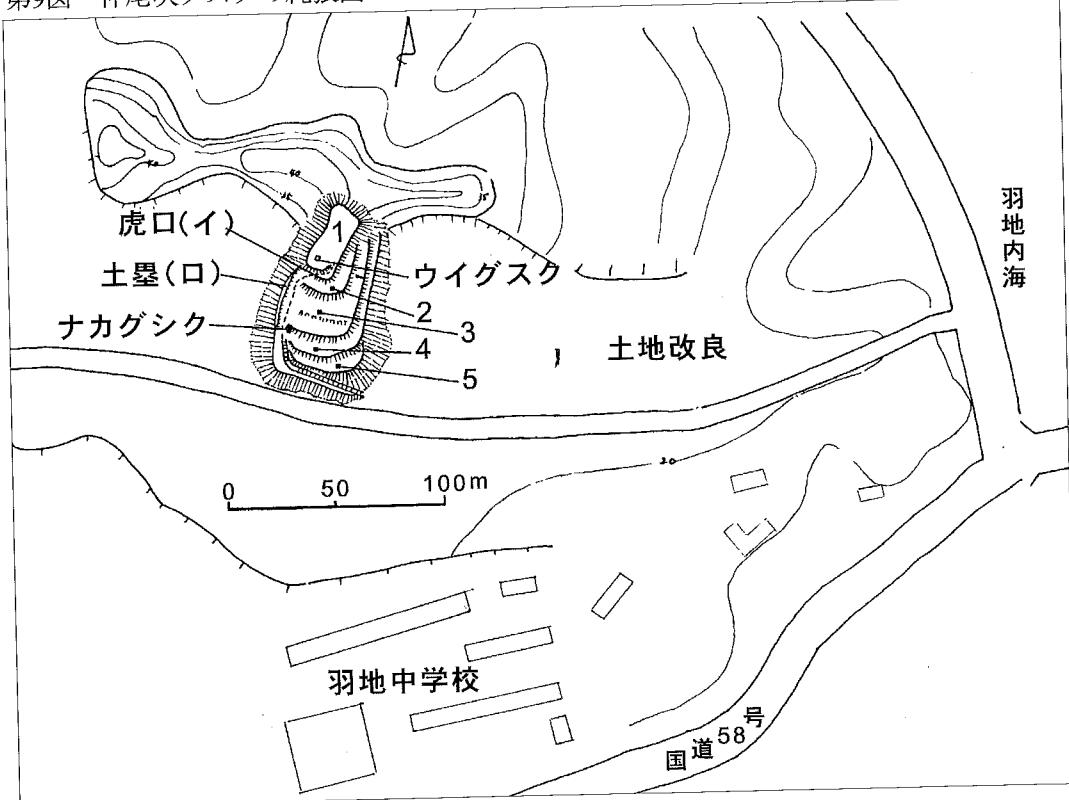


親川ゲスク（左） 仲尾次上ゲスク（右）

仲尾次上グスク

名護市字仲尾次の仲尾次原にあるグスクである。名護市立羽地中学校の北側背後的小高い丘を地元住民は上グシクと呼んでいるが、ここが仲尾次上グスクである。この一帯の旧地形は土地改良事業により大きく改変を受けている。今、新・旧の地図を参考にしつつ

第9図 仲尾次グスクの縄張図

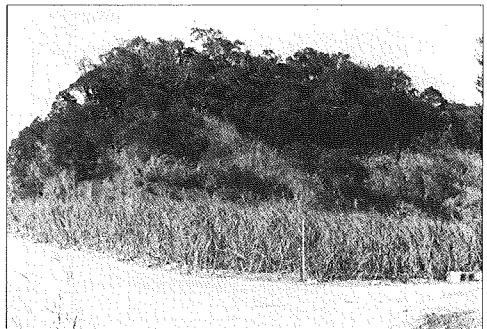


地形を比較すると、標高30mラインより上にあった丘は削られ、マタ⁽¹⁶⁾と呼ばれる小さな谷は埋められて農耕地に生まれ変わっていることがよくわかる。もちろん、仲尾次上グスクについても、標高30m等高線を境にしてそれより下位にあった支尾根や起伏については一様に平坦化されているといった状況である。したがって、グスクの縄張りも現状の地形によって把握する以外ない。そのことを前提に縄張り図を見ていただきたいと思う。

この仲尾次上グスクには、仲尾次の住民の間で古くから信仰されている2箇所の拝所と1箇所の拝泉がある。二箇所の拝所については、ウイグシク・ナカグシクなどと称されてグスクの曲輪内に残っている。拝泉については、曲輪4の西縁部にコンクリート製の円形井戸枠が標示されているのみで、実際に水があるわけではない。現状では、そこに井戸があったのか、あるいは標示だけであるのか判然としない。集落の古老が伝えるところによれば、仲尾次上グスクの方から現在の集落に移動してきたという伝承があり、古集落との関わりで捉えられるグスクである⁽¹⁷⁾。

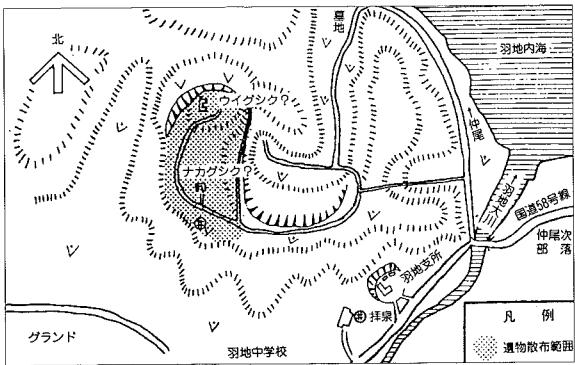
仲尾次上グスクの縄張りは、標高48mを測る丘のピーク部を中心にして、東側と南側に階段状の曲輪群を配置して築かれたもので、石墨を用いない土のグスクである。ピーク部の曲輪1が主郭である。ここからの眺望はよく、羽地内海や屋我地島などが展望でき、とくに、羽地内海に注ぐ羽地大川の河口部あたりから、旧勘定納港にかけての見通しがよく効く位置にある。曲輪の規模は7×20m程の広さで、現在、この曲輪の南西隅に石を組んだ小祠が安置されている。この祠を指標に村人たちはウイグスク（あるいはナカグシクという人もいて、曖昧さがある）と称している。もともとこの曲輪の名称として呼ばれていたのであろう。曲輪1の北は、約4mの断崖をなして落ち、その下にここから派生する支尾根が北にのびている。西側は、土地改良事業によって切り取られ、下の畑との比高差は10m以上もあり、人工的な急勾配の法面になっている。南側と東側は雛段状となって続いているが、そこに小曲輪群が形成されている。

主郭となる曲輪1の虎口は南東隅に開いており（イ）、坂虎口になっている。この虎口を出ると、曲輪2となる。主郭と曲輪2との比高差が約2m程もあるので、虎口をくぐって主郭部へ入ろうとする侵入者は、完全に上から押さえられる恰好となり、虎口の防御は固い。曲輪2の下には曲輪3があるが、この曲輪は東側を廻ったところで、約1



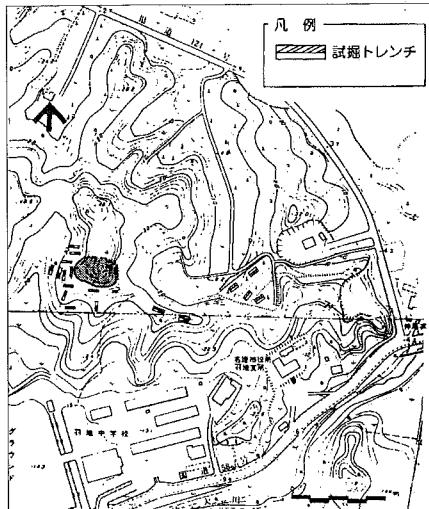
図版10 仲尾次上グスク（東から）

第10図 仲尾次上グスクの遺物散布範囲



『仲尾次上グスク遺跡』名護市教育委員会1988年3月より

第11図 仲尾次上グスクの試掘トレンチ



『仲尾次上グスク遺跡』
名護市教育委員会1988年3月より

m程高くなる。また、南側では、50~60cmの段差で低くなっている。この低くなった平場の北西隅に石を組んで造られた小祠が安置されているが、この祠を指標に地元の人はナカグスクと称しているようである（ウイグスクと言う人もあり、伝承が曖昧）。おそらく、この曲輪3のことをナカグシクといっていた可能性があり、50~60cmの段差のある平坦面にグスク建物があったことも考えられる。曲輪3の下に約1m程下がって曲輪4がある。ここは、標高約40mの等高線ラインで、この曲輪と主郭との比高差は約8mとなる。さらにその下に曲輪5の腰曲輪が廻っている。

曲輪1の西南西の切岸下方には、土壙口が丘の麓に向かって縦にのびている。土地改良事業によって西側の土壙側面が削られているため、全体的な形をつかむことはできないが、旧地形では、この土壙の西側に緩い傾斜面が続いていたためにそこを警戒して築かれた土壙の可能性がある。

さて、このグスクに入るには、現在では、曲輪5の下に取りつけてあるコンクリート造りの階段を登って行くようになっている。しかし、この階段は土地改良事業に伴って取りつけられたものでありもとの形ではない。以前はどのようにして城道が取りついていたのであろうか。地元の人たちに聞いて見ると、コンクリート造りにはなったが、道の取りつき方はほぼ以前のままだということであった。また、名護市教育委員会が行ったグスクの調査報告書にもほぼ今の形で道が主郭の方向に伸びていることがわかる。すると、城道の取りつき方については、侵入してくる敵兵に対して、グスクの曲輪群からたえず右脇腹が狙えるように工夫して置かれていることが看取される。おそらく、グスク内に入ってくる侵入者は、上有る曲輪5や曲輪4から頭上攻撃や側面攻撃にさらされたのであろう。これらの事実から見ても、高い石垣こそな

いが、土を削って曲輪や切岸を設けることで防御を固めており、軍事的な目的で築かれた遺構だということは明白である。

この仲尾次上グスクを含む一帯の土地については、県営仲尾地区土地改良事業地内にあるとの理由で、昭和60年から62年までの3年間にわたって遺跡範囲確認調査が実施されている。その結果について名護市教育委員会から調査報告書⁽¹⁸⁾として刊行されているので、その中から発掘成果について概観してみよう。

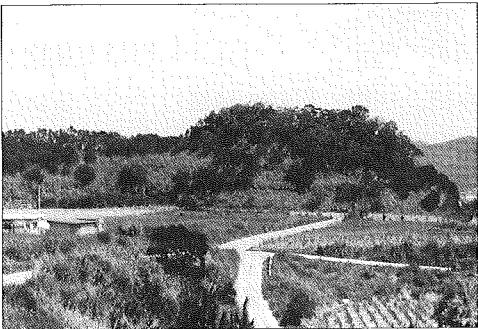
第10図は報告書の掲載された仲尾次上グスクの位置図である。縄張図がないために、曲輪の状況がはっきりしないのは残念であるが、アミのかかった部分が遺物散布範囲だと記されているので、考古学的な調査の結果からは、一応、現状の城域はすべて遺物散布地として見ることができる。発掘調査は、ウイグシク（曲輪1）とナカグシク（曲輪3）の西と南に続く曲輪群（報告書には段々畑としか記載されてなく、曲輪という認識をしていない）に2m幅のトレンチを設定して実施したことになっている（第11図）。発掘の結果、グスク土器、カムイ焼、日本製陶磁器、貿易陶磁器などが出土し、とくに中国産の陶磁器については、「13世紀後半～19世紀までのものが得られており、親川グスクとほぼ同時期の遺跡と捉えられる」と報告されている。なお、貿易陶磁器の分類表については報告書から転載しておく（第1表）。親川グスクは、この仲尾次上グスク

第1表 仲尾次上グスク出土の
貿易陶磁分類表

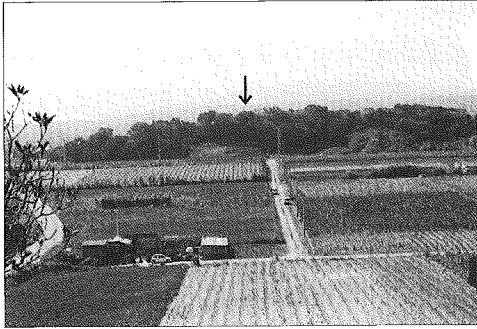
	器種	年代	備考
①	中 国	13C～14C中葉	鶴蓮弁文
②	〃	14C末～15C中葉	口縁部端反り
③	〃	〃	〃
④	〃	14C末～15C	外面ヘラ描文（口縁部の雷文帯か）
⑤	〃	15C後半～16C前半	外面線描刻先蓮弁文
⑥	〃	〃	〃
⑦	〃	〃	〃
⑧	〃	15C後半～16C	〃
⑨	中 国	15C後半～16C	外面線描刻先蓮弁文
⑩ クロム青磁	瀬戸・美濃系	明治以降	
⑪	中 国	15C～16C前半	内面ヘラ描文
⑫ 青磁皿か	〃	〃	稜花形、内面ヘラ描文
⑬	〃	15C末～16C	口縁部端反り
⑭ 小杯	中 国	16Cか	見込蛇ノ目釉ハギ

島袋善弘他「仲尾次上グスク遺跡」『県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書』
沖縄県名護市教育委員会 1988年3月より

の西約500 mの至近距離に立地し、この一帯の集落をおさえる拠点的な城として認識できるグスク跡である。その縄張り構造は、一本の大堀切と主郭およびそれに付属する腰曲輪群を有する比較的規模の大きい、いわゆる土のグスクである⁽¹⁹⁾。この親川グスクの周辺には、規模の小さなグスクが南側約600 mの至近距離にデーグスク、仲尾次上グスクが東に、南東側1300mの距離に親グスクの分布が見られる⁽²⁰⁾。おそらく、これらの小規模グスク群は親川グスクを中心としてセットとして存在していた可能性は高い。



図版11 仲尾次上グスク（南から）



図版12 仲尾次上グスクから親川グスクを望む



図版13 仲尾次上グスクの虎口



図版14 仲尾次上グスク主郭にある祠（ウイグスクと呼ばれている）

おわりに

沖縄本島北部には、いわゆる「土より成るグスク」が多いのであるが、今回はそのうち5つのグスクについて述べてきた。これらのグスクを取り上げたのは、別に深い意味があつてのことではない。取り上げた5箇所のグスク全てについて言えることは、遺物が確認されなかつたり、石垣などの遺構が全くないグスクの例として、グスクの性格をめぐる論争のなかでも常に引き合いに出されるグスク群のうちの一つであるということである。本稿では、とくに、この種のグスクを取りあげて個々のグスクの縄張り構造を分析し、防御遺構の整理を行うことで、グスクのもつ軍事的な側面について理解すること

とを目的とした。縄張り調査のなかでどれだけこうした目的を達成できたか、はなはだ疑問であるが、従来のグスク調査では理解できなかったグスクの持つ軍事的な側面について、こうした縄張り調査を通して作成された縄張り図から案外見えてくるのではないだろうか。

今回取り上げたグスクは、石垣や石塁などはないが、自然の山や丘のピーク部と中腹部に防衛された削平地（曲輪）と切岸（城壁）、あるいは堀切などを有している。そのことが、すなわち城であることの証明であるが、なかなか、石垣遺構に馴染んだ私たちにとっては理解しにくい面がある。

これまでのように石垣遺構のみのイメージでグスクを捉えていくと、石垣遺構以外の重要な遺構（防衛された削平地や切岸をつくり、あるいは堀切を掘る仕事は大がかりな土木事業であり、進んだ築城技術を要するということについて知る必要がある）を見落とすことになり、グスク全体の縄張り把握の上で不十分な結果を招きかねない。今後のグスク調査では、石垣遺構だけでなく、切岸や土塁、堀切などを利用した曲輪群がないかどうかについても最大の注意が必要だと思われる。こうした精密な縄張り把握を通して投影された縄張り図から、個々の防衛遺構の整理・分析を行うといった基本的な作業こそが、グスク調査をおし進めていく上で最も重要なことだと私には思えるのである。

註

註（1）名護グスク、嘉陽グスク、屋良グスク、喜屋武グスク、幸地グスク、

津記武多グスク、佐敷グスク、宮古島の野城遺跡など。

〃（2）根謝銘グスク、名護グスク、親川グスク等はその典型例である。

〃（3）拙稿『城一城に語らせたい地域の歴史ー』沖縄県立博物館 1992年3月。

〃（4）いわゆる「土より成るグスク」は、とくに鹿児島県奄美群島、沖縄本島北部に多く分布するが、沖縄中・南部の非石灰岩地域にも分布が見られる。

〃（5）1698年、大嶺親方基橋（鄭弘良）が中国から神像を持ち振り、旧小禄村の大嶺に祀らせたと『球陽』に見えているので、実際、いつごろ沖縄に伝來したか不明であるにせよグスク時代までは古くさかのぼることはないであろう。

〃（6）『おきなわ風土記全集』第1巻 国頭郡編 沖縄風土記刊行会 1967年4月。

〃（7）渡名喜島の里遺跡の場合もその例である。

〃（8）藤木久志『雜兵たちの戦場』朝日新聞社 1996年1月。

〃（9）稻村賢敷『沖縄の古代部落マキヨの研究』琉球文教図書株式会社 1968年11月。

- 〃 (10) 前掲書 (9) 321頁
- 〃 (11) 『大宜味村の遺跡-詳細分布調査報告書一』 大宜味村教育委員会 1984年3月。
- 〃 (12) 島袋源一郎『沖縄縣国頭郡志』三版 沖縄出版会 1967年11月。
- 〃 (13) 新城徳祐『沖縄の城跡』 (株) 緑と生活社 1982年8月。
- 〃 (14) 拙稿「歴史の道とグスク」『沖縄県教育委員会文化課紀要』第4号 1987年3月。
- 〃 (15) 前掲書 (13)
- 〃 (16) 山と山に挟まれた小さな谷間をこの地方でマタという。
- 〃 (17) 羽地村誌編集委員会編『羽地村誌』 羽地村役場 1962年8月。
- 〃 (19) 『県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書』 名護市
教育委員会1988年3月。
- 〃 (20) 拙稿「グスクの縄張りについて（下）」『沖縄県立博物館紀要』第20号 1994年
3月。
- 〃 (21) 『名護市の遺跡（2）－分布調査報告－』 名護市教育委員会 1982年3月。